

高松に住むという選択

著書「クリエイティブ都市論」(ダイヤモンド社)の中でリチャード・フロリダは人生における選択として、「何を行うか(職業)」、「誰と行うか(結婚)」と同等程度に「どこで行うか(居住地)」が最も重要である、と述べています。そして、美的感覚や基本的サービスに優れ、開放性や寛容性が高い都市が、特に彼がクリエイティブ・クラスと呼び重要視している創造性に富む人材の居住地として選択されやすく、発展する可能性が高いと説いています。これは、本市の目指している創造都市の姿にも重なります。

移住政策の展開が盛んになりました。地方創生の名の下に、首都圏などの大都会から地方への、これまでとは逆の人の移動の流れを作るべく、多くの自治体においてさまざまな努力がなされています。本格的な人口減少社会が到来し、このままのトレンドが続けば、地方はどんどん疲弊し、Uターンすべき故郷も失われかねません。「ふるさととは遠きにありて思うもの」、と室生犀星(むろうさいせい)がうたった叙情的な想いに浸る余裕もなくなりつつあります。大都市圏以外の多くの地方自治体には、強い危機感があるのです。

本市も、今年度から「移住・定住促進室」を政策課内に設置し、市の魅力をPRしながら、移住希望者の相談に乗り、その後押しを図ろうとしています。去る6月23日には「高松首都圏交流会」を東京駅近くの京橋にあるラウンジを借りて実施しました。当日の移住などを希望する参加者は、40名弱。地元出身者は故郷高松、香川に関する思いを、Uターン希望者は高松の可能性、魅力などを、それぞれが熱く語ってくれ、非常に盛り上がったイベントになりました。その交流会議の運営を手伝ってくれた四国若者会議の呼びかけ文には次のような言葉がありました。「若者が求めているのは『移住』や『就業』だけでない、その延長線上にある、ひとりひとりの価値観を尊重した、新しい働き方、豊かな生き方そのものです。」

人生の大きな選択である居住地。それを高松に求める人の人生を、より鮮やかに、そしてより豊かにできる他にはない魅力を持った都市でありたいと思います。「ふるさととはそこに住まひて楽しむもの」、と多くの人にうたっていただきたいものです。